
世界最強の海賊団が魔法世界にやってきた。

ヤマトノオロチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界最強の海賊団が魔法世界にやってきた。

【コード】

N0293M

【作者名】

ヤマトノオロチ

【あらすじ】

ミットチルダに突然現れた四皇の一角にして世界最強の海賊団、白髭海賊団。その時ミットチルダは激震する。

プロローグ

ミットチルダ沿岸部。そこにはロストロギアと呼ばれる古代遺失物を専門にする管理局の精鋭部隊「機動六課」の隊舎が存在する。ここでは今スバルとティアナは散歩をしていた。

スバル「うーん早く起きるのもたまにはいいねえティアナ」

ティアナ「そうね、たまにはこうゆうのもいいわね。でも霧で海は見れないけどねえ」

スバルとティアナは早めに起きたため隊舎の海岸を散歩していた。しかしいつもだったら海が見えるはずが今日は霧に覆われており遠くの部分が見えなかった。しかしそこでスバルは大きな妙な影を見つけるのだった。

スバル「あれ？、ティアあそこらへんに大きな影が見える？」

ティア「確かに見えるはそれも一隻だけじゃないわ」

確かにティアナの言う通り周りにいくつか大きな影が存在していた。そしてやがて辺りに存在していた。霧が薄れていきやがて大きな影の全貌が明かされてきた。

スバル「ねえティア、あれって船じゃないかな？」

ティアナ「確かにでもあれって帆船でゆう船じゃないの私も初めてみるは」

スバルとティアナは帆船を見るのは初めてだった。ミットチルダでは近代的な船がほとんどのため帆船はほとんど存在しない。

スバルとティアナは帆船が初めてなため新鮮な感情を覚えた。

スバル「私帆船見るの初めて」

ティアナ「私だって同じよでもなんであんな船がこんな所に突然？」

スバル「ティア！、あれ旗かな？なんかマークが見える。」

ティアナ「本当！？」

ティアナは旗の所目をみやると確かにマークらしきものが見えた。しかしそのマークには見覚えがあった。

ティアナ「あれってもしかして？」

旗のマークが鮮明になっていき全体がわかってきた。そこにあつたドクロ絵が書かれていた。そして何故かドクロには髭が存在していた。しかしティアナはそのマークが何を意味していたのかすぐに理解した。

スバル「ティア！どうしたの？」

ティアナは驚きの表情をしていた。

ティアナ「あれっでもしかして海賊船!？」

突如現れた五隻の海賊船その時ミットチルダは激震するのだった。

第1話 来航(前書き)

白髭海賊ついにミットチルダにやってきました。

ちなみにワンピースの時間軸は空島編の後になります。

ではごっご

第1話 来航

あれから数時間後突如現れた謎の五隻の海賊船はミットチルダ湾の真ん中で止まっていた。港には突如現れた五隻の海賊船を見るために多くの野次馬がいた。あるものは驚きのあまり感激したり写真をしたりしていた。またあるものは突如現れた五隻の海賊船に恐れ不安を隠せない人達も大勢いた。五隻の海賊船の周りには状況を撮影している民間のテレビ局のヘリや警戒のために派遣された航空武装隊の航空魔導士何人が上空を警戒していた。

すでにこの事はミットチルダ全域に伝わっていた。

「ミットチルダに突如現れた謎の五隻の海賊船は今だに沈黙を続けており航空武装隊が今も警戒を続けています。」

周辺地域の住民は突如現れた海賊船に不安の声が高まっています。現在管理局は今だに正確な情報を公開しておりません。住民の間では戦闘が起きるのではないかと不安の声が上がっておりパニックが起きるのではないかと懸念されています。」

テレビに出ている。リポーターは的確に情報を流していた。

一方機動六課では一番近いため隊舎において機動六課では対策会議が開いていた。暗い会議室には機動六課の部隊長八神はやたとスターズ分隊長高町なのは副隊長のヴィータ、ライトニング分隊長

フエイト・テッサ・ハロウンと副隊長のシグナム達が話合っていた。

はやて「んで、現在の状況はどうなってる？」

シグナムは直ぐ様にはやて達に現在の状況を報告した。

シグナム「現在航空武装隊の航空魔導士達が海賊船の周りを警戒体制を続けています。港区には地上部隊がパニックが起きないようにしています。海賊船からは今だになんの動きはありません。」

はやて「そうか、わかったはで海賊船について何かわかった？」

フエイト「まだたいした情報はないわ、ただ確認するだけで五隻の船にはかなり人数が確認しているは」

なのは「船の形からしてミットチルダの船ではないかかもしれない。もしかしたら昨日の夜起きた小規模の次元震と何か関係しているかもしれないは」

ヴィータ「スバルとティアナの話によれば突然霧から現れたそうだ」

フエイト「でもシャーリの話だとあれだけの規模次元転移は考えられないと言っているは」

はやて「ま、何にせよこのままだとらちがあかない。いずれ管理局もなんらかの動きがあるやろっ」

その時、突然シャーリがはやてたちに連絡してきたのだった。

シャーリ「八神部隊長！大変です。」

はやて「どうしたん！、シャーリ？」

シャーリ「先ほど航空隊と謎の海賊船団と戦闘がありました。」

なのは・フエイト「え！？」

はやて「なんやて！、なんでそんなことが？」

シャーリ「それが航空隊の1人が不用意に近づいたら突然気絶したんです。」

はやて「気絶!？」

シャーリ「はい、それで他の隊員が逆上して海賊船に向けて発砲したんです。それで海賊側も発砲しまして、それで航空隊も一時撤退しました。」

はやて「そんなことが…」

シャーリ「もう一つなんですけど」

はやて「まだなにかあるん？」

シャリ「はい、！地上本部からの要請で海賊たちの交渉をしろと」

ヴィータ「なんだって!？」

なのは「私達が交渉を!？」

シャ「はい、そちらから現場近いとそれと万が一に備えて戦える部隊が交渉に行けばすぐに対応ができるとゆうことで」

はやて「そつゆうことか」

はやては内心では地上本部の本心はわかっていた。地上本部は何かと本局との折り合いが悪い。地上勤務とはいえ所属しているのは本局である。それに機動六課は何かと突っ込みどころが満載の組織である。犯罪者には犯罪者に交渉するほうお似合いだと思っっているんだろ。それに万が一交渉に失敗しても責任は機動六課に押し付けることができる。

シャリ「八神部隊？」

はやて「わかった。その任引き受けたる」

フェイト「はやて!?!」

シグナム「主!危険です。何が起きるかわかりません。」

はやて「このまま手をこまねいてもしかたあらへん」

シグナム「ですが」

はやて「大丈夫心配あらへん大丈夫」

なのは「はやてちゃん」

はやての言葉で少しの間辺りは沈黙を続けた。

フェイト「……わかったははやて、でも護衛として私も行くは。」

はやて「フェイトちゃん」

シグナム「主！では私もお供します。」

はやて「シグナム！わかったは二人ともありがとう。」

そして交渉のためにははやて達は白鬚海賊団の船モビーデュック号にむかうのだった。

第1話 来航（後書き）

ついに次回から白ひげたちが登場します。

はたして交渉なるか

次回からもお楽しみに

第2話 交渉（前書き）

やっぱり漫画見たく表現するのが難しい。

では どうぞ

第2話 交渉

モビーディック号甲板、そこには数百人ほど屈強の男達がいた。上空を監視していたクルーの1人が空にへりが近づくの気づくのだった。

「ん、なんだあれは!？」

「おいどうした!」

「あれを見る、空から鉄の塊が空を飛んでるぞ」

「いったいあれはなんだ」

「とにかくオヤジに伝えるぞ。」

「わかった。」

男はすぐに走り去るのだった。

「オヤジ!、オヤジ!」

??」「どうした」

そこにいたのは普通の人間をはるかに上回る巨大をした老人がいた。しかし老人の体とは思えぬほどのがっしりとした肉体をしていた。体には古傷が多数存在していた。体中には点滴のチューブがつながっていた。顔には特徴的ともいえる長く白い髭を蓄えていた。この老人こそ白髭海賊団の船長であり、四皇のひとりありかつて海賊王ゴール・Dロジャーと互角に渡りあえた大海賊であるエドワード・ニューゲートである。

「上空に鉄の塊が飛んできている。しかもこちらに向かっている。」

白ひげは上空を見ると確かにクルの言っていた物がこちらに向かっていた。

「オヤジどうする。撃ち落とすか？」

白ひげ「まあ、待て、俺がかまをかける。」

そうゆうと白ひげはへりに向けて睨み付けるのだった。

はやて、フエイト、シグナムを乗せたへりはまっすぐにモビーデユック号にちかづいていた。

ヴァイス「八神部隊長！、そろそろ目的地に到着します。」

はやて「わかったはヴァイス君！、へりを可能な限り船を近づけて。」

ヴァイス「了解しました！。八神部隊……………」

はやて「ヴァイス君どないした…、うわあ！」

シグナム「ヴァイス！どうした！」

突然へりパイロットのヴァイスがしゃべっている最中にヴァイスが

突然意識を失い欠けるのだった。それによりヴァイスは一瞬操縦幹を支えなかったためヘリのバランスをくずしてしまった。

フェイト「ヴァイス！どうしたの？」

ヴァイス「フェイト隊長！すいません、一瞬意識が遠のいて」

フェイト「意識が失う？いったいどうして？」

ヴァイス「俺にもわかりません。別に疲れているわけでもないのに」

ヴァイスの様子を見ていたシグナムもまるで何かに威圧されたかのようなプレッシャーを感じた。

シグナム「さっきのプレッシャーはいつたい」？。

はやて「で、ヴァイス君どう？、まだ操縦できる？」

はやてはヴァイスを心配しつつこのまま行けるか確認する。

ヴァイス「大丈夫です。行けます。」

はやて「そうか、わかったは、じゃあ、このまま進んで。」

ヴァイス「了解です。」

白ひげ「ほお、俺の覇気を浴びて気絶しねえか」

??「あの中にいる連中、なかなかやるんじゃないかよい?」

白ひげの隣いる上着を着り胸の真ん中に白ひげ海賊団のマークのイ
レズミをした男は白髭海賊団一番隊隊長マルコである。

マルコ「どつするオヤジ?俺がつぶしにいかよい」

白ひげ「まあ、待てどんなやつか少し興味をもった。とうしてやりな。」

マルコ「了解。」

ヴァイス「八神部隊長！到着しました。」

ヘリはモビーディック号の甲板に近づいていた。

はやて「ありがとうございます。ヴァイス君はそのまま上空で待機しといて。」

ヴァイス「了解です。」

はやて「ほんならフェイトちゃん？、シグナム？」

フェイト「うん、わかったよ」

シグナム「了解しました。主。」

三人はへりから降り甲板に降りたつた。

はやて「あそこにいるおじいさんがこの船の責任者やるつか？」

はやて達の目の前にひとときわ大きく目立つ老人を見てこの船の船長ではないかと疑うのだった。

シグナム「主、この老人はただ者ではありません！。」

フェイト「シグナム！どうしたの？」

シグナムはすぐにこの老人がただ者ではないと感じいた。
シグナム「なんてものすごい威圧感！、リミッターを外して勝てそ

うにない。」

フェイト「シグナムがここまで動揺するの初めて見た。」

シグナム「それに、この老人だけじゃない！」

フェイト「それはどうゆことシグナム？」

シグナム「あの老人の隣にいる男もかなりの手練れだ。それに周りにいる者達もただ者ではない」

フェイトはシグナムの言葉を聞いて周りを見ると男達がこの様子を見守っていた。全員服装などに統一性はない持っている武器も様々である。刀やサベル、カッタラス、昔の時代に使っていたような銃やバズーカなど多種多用の武器を装備していた。フェイトも直ぐにシグナムが動揺している理由に気が付いた。

はやて「海賊の皆さん。私は交渉役として時空管理局からやってきました。八神はやてです。」

白「時空管理局？、なんだそれは。」

シグナム「貴様！！主に向かつてなんたる……」

はやて「シグナム、ここで手を出したらあかん。」

シグナム「は、はい！わかりました。申し訳ございません。」

はやてはシグナムを静止させるとすぐに白ひげに目を向くのだった。

白「まだこつちの名前を言ってなかった。俺はこの白髭海賊団の船長エドワードニューゲドだ。どうやらてめらは世界政府の回し者じゃないな」

はやて「世界政府？、私達時空管理局は各次元世界を守る組織です。ニューゲートさん貴方は何処から来たのですか？いったいこのミッドチルダになにに来たのですか？

白ひげ「さあな、俺達は航海の最中に突然霧に現れて気が付いたらここに来たただ。」

はやて「そうですか、では単刀直入に言います。ここは貴方達の世界ではありません。それと管理局に降伏してください!。」

白ひげ「!?!」

はやての大胆な発言に白髭海賊団のクルー達は驚いた。

はやて「このまま行けば住民に迷惑がかかります。大人しく降伏してください。クルーにもみなさんにも危害を加えません。ですから
…」

白ひげ「フフ…グララララララララ!」

はやて「!?!?!」

はやて達は白ひげが突然高笑いして驚くのだった。

白ひげ「誰がそんな要求呑むと思っているのか!?、バカヤロウが
!」

はやて「な!?!」

白ひげ「俺達は海賊だ!、おいそれとただ従うと思っているのか!
?」

はやて「ですが!」

白ひげ「俺達はかつてにやらせてもらっ!。海賊は自由じゃないと
やってられないからな。アホンダラ!

フエイト「正気ですか?、貴方達は管理局を敵に回してもいいので
すか?」

白ひげ「だからどうした?例え誰だろうと俺達のじゃまをするもの
は誰だろうと叩きのめすだけだ」

白ひげの言葉にはやて達は数秒間だけ沈黙した。そしてはやては再び白ひげに話すのだった

はやて「ニューゲードさん。管理局はこのまま交渉が失敗すれば力強くてもあなた達を捕縛するようになっています。それでもいいのですか?。」

白ひげ「恐れるにたらん！俺は白ひげだ！！！」

白ひげの言葉にはやて達は一瞬圧倒されるのだった。もはや一瞬間発の状態であった。その時であった。突然はやてに通信が入るのだった。

白ひげ「!?!」

はやて「ロングアーチから通信!?!」

はやてはすぐに回線を開くのだった。

シャーリ「八神部隊長!!!大変です!!。」

はやて「シャーリ!、どないしたん急に!？」

シャーリ「八神部隊長達のいるその船の近くに大量のガジェットがそちらに向かっています。」

はやて「なんやて!?!？」

フエイト「そんな、何でこんな時に!！」

白ひげは急に騒ぎ始めた。はやて達を見て不審に思うのだった。

「オヤジ!!--ここに大量の何かがこちらに向かっている。」

白ひげ「!?!？」

はやて「!?!？」

はやてはすぐに遠くの方を見るとそこには200以上のガジェットがこちらに向かっていた。

はやて「なんてことや！」

シグナム「主いかがいたします。」

フェイト「今すぐに動けるのは私達しかいない今はここはガジエットの全滅が優先したほうがいい」

はやて「……………わかった。ここはガジエットの破壊が優先や皆迎撃にいくで！」

シグナム「了解しました。」

フェイト「了解したは、はやて」

白ひげ「まちな！」

はやて達はデバイスを起動しようとした時、突然白ひげに呼び止められるのだった。

はやて「!!!?!」

白ひげ「理由はどうあれ俺達の船を襲うとはいい度胸だな、てめら
!!、引っ込んでな!!」

シグナム「な!？」

フェイト「何を言っているのですかあなたは!、あれはあなた達が
どうこうできるものものでは……」

フェイトが言い終わるとした時突然フェイト達のところから炎が現
れてその中から1人の青年が現れた。

シグナム「貴様、何物だ!？」

??「まあ、まあ、ここはオヤジに任せなお姉さんがたら」

フェイト「あなたは一体、何者ですか？」

??「自己紹介がまだだったな、俺はこの2番隊の隊長ポートガ
ス・D・エースだよろしくな」

フェイト「はあ〜どうもこちらこそどうも……て!?!、そうではな

くて！」

エースの言葉についのせられてしまうフェイト。一方白ひげはその巨体を動かし横においている薙刀を持ちガジェットのある方向に向かうのだった。

マルコ「オヤジ、ここは俺が…」

白ひげ「ふん！、あんな鉄屑も俺一人で充分だ、てめらは下がるときな！！」

白ひげはガジェットの大群の方向に拳を振り下ろすのだった。

はやて「いったい何しているや？」

はやて達は白ひげのやっていることが何なのか理解できなかった。だが異変はすぐに起きるのだった。

「パリンー！！」

フェイト「何なのあれは!？」

はやて「空間にヒビが!」

白ひげが拳を振り下ろすと突然空間にヒビが入るのだった。そしてヒビから巨大な衝撃波が発生するのだった。

シグナム「あれはいつたい!？」

エース「あれはオヤジの悪魔の実、グラグラの実の能力だ」

フェイト「悪魔の実!？」

白ひげが放った衝撃波はそのままガジェットの方に直進するのだった。そして衝撃波はガジェットにぶつかりまたたくまに全滅するのだった。

フェイト「一撃でガジエツトの大群を……」

シグナム「全滅!!」

はやて「これが白ひげ海賊団の力!!」

第2話 交渉（後書き）

白ひげチートし過ぎ！

漫画では怪物と例えていましたがまさにそのとおりです。

次回はエースが活躍します。

第3話 神（ゴッド）（前書き）

文章の表現は難しいです。今回は少なめにしてみました。スカリエ
ッテイ側の話です。

第3話 神（ゴッド）

?? 「ドクター、送り出したガジェットが全機全滅しました。」

?? 「ああ、今映像を見たさ、まさかあれだけのガジェットを数秒で壊滅させてしまうとは正直驚いたよ」

?? 「しかしドクター、ガジェット250機が一瞬で全滅してしまいました。こちらの戦力がかなり減ってしまいました。」

?? 「心配はいらないさウーノ、減ってしまえばまた作ればいいことだ、それに見合うだけのデータが撮れたと私は思うがね。」

ミッドチルダの何処かに存在するところある施設。ここは管理局が広域指名手配犯として捜索している広域次元犯罪者ジェイルスキャリアエッセイのアジトである。中は薄暗く辺りには液体で満たされた生体ポットが多数並んでいた。

?? 「しかしこの男の能力はすばらしいものだ。」

おもむろに映像をだしたこの白衣の男こそジェイルスカリエッティである。映し出されたのは白ひげがガジェットを全滅させている映像である。

スカリエッティ「この男が拳を打ち出した後に空間にヒビが、いやこれは空間ではなく空気にヒビが入っているのだろっ。」

??「そんなことが可能なのでしょうか？」

映像でスカリエッティと話しているこの女性はスカリエッティが作り出した戦闘機人NO1ウーノである。スカリエッティの作り出した作品でありスカリエッティの秘書のような役割をしている。

スカリエッティ「おそらくこの男の能力は震動を操る能力だろう。空気を震動させ衝撃波を発生しているのだろっ。」

スカリエッティは正確に白ひげの能力を的確に分析してすぐに解明していくのだった。

スカリエッティ「あの力から考えればおそらくその気になれば震動

だけでなく地震そのものを発生することも容易だろう。」

ウーノ「そんなことが可能なのでしょうか？」

ウーノは白ひげの能力を信用できずにいた。確かに戦闘機人にはインテリジェンスと呼ばれる固有スキルが存在する。またほかには自身の魔力性質を電気や炎熱に変換できるものもいる。また古代ベルカ式の稀少技能レアスキルを使えるものがあるがそれでも白ひげの能力と比べたら天と地の差にいる。

スカリエッティ「彼の言っていた悪魔の実の能力者は我々の常識を超越しているからね」

ウーノ「確かにそうですね。」

スカリエッティ「しかし！」

ウーノ「ドクター？、」

スカリエッティは今までにない狂喜に満ちた顔していた。

スカリエッティ「悪魔の実とは素晴らしい物だ、それを食したただけで簡単に能力者を作れる。最初に彼の能力を見た時正直驚いたよ、ここまで興味が尽きないのは久し振りだよ」

ウーノ「そのことですがドクター？」

スカリエッティ「どうした？ウーノ。」

ウーノ「あの男を仲間に加えるのは危険ではないかと」

スカリエッティ「ほう？、それはどうしてかね？」

ウーノ「確かにあの男の力は我々ナンバーズが全員が束にかかっても勝てるとは思いません。ですがあの男はただの気まぐれで我々を皆殺ししてもおかしくありません。」

??「それは私のことを言っているかね女？」

ウーノ「貴様は!？」

スカリエッティ「君かい?、起きていたのかね」

突然どこからもなくあわられたのは上半身が裸で頭に頭巾を被り背中には4つの和太鼓を着け杖を携えた男であった。

??「ヤハハハハハ!、貴様らの会話は私の心綱マントラですでに筒抜けだ、それと女。」

ウーノ「なんででしょうか?」

??「私に対して何か言いたそうだがやめたまえ、妙な考えをすればここを壊滅させるのは造作もないからな」

ウーノ「!!!?」

映像越しにいるのにウーノは一瞬背中に寒気を感じた。この男の名

はエネルギー、かつて空島スカイピアで神として君臨していた男、自然^{ロギア}
系ゴロゴロの実の能力を持つ雷人間である。」

第3話 神（ゴッド）（後書き）

エネルギー登場！！改めて見るとエネルギーで最強です。はっきりいって三人娘でも勝てないと思います。

神がスカリエッティ側につきました。

次回はエースが活躍します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293m/>

世界最強の海賊団が魔法世界にやってきた。

2010年10月8日23時20分発行